

講演 一茶の連句

高橋, 順子

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

89

(開始ページ / Start Page)

2

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

2014-03-24

〈講演〉

一茶の連句

八年ぶりくらいに法政大学に参りまして、お酒落で素敵なきヤンパスになったな、という感じがいたしました。私が非常勤講師を勤めていました時は、正門入ってすぐの広場で応援団の人たちが、「エイエイオー」みたいに、そして女子学生たちがダンスを踊っていて、若いっていいなと思っただけを通ったりしていました。懐かしいというよりは素敵になったなという感じでした。土手の道が好きで、楽しい通勤路でした。

週に一日しか参りませんが、文芸コースのゼミもしましたけれど、私は芭蕉・蕪村・一茶の連句と現代詩の「表現」も講義しました。実はわたしは連句は好きだったんですが、芭蕉から入ったわけではなくて。

私は出版社に勤めておりまして、これが長かったんですが、青土社というんです。ここで大岡信さん、丸谷才一さん、安東次男さん、石川淳さんたちが『歌仙』という本をお出しになりまして、歌仙というのは三十六句形式の連句のことなんです。

高橋 順子

三十六歌仙にちなむものなんですが、これが面白くって。そこではまってしまった。残業して居酒屋でちよつとお酒飲んで帰ろうという時に、編集者の私たちは連句を何にも知らないのに見よう見まねで連句をして、メモをぼろぼろになるまでポケットに入れて持ち歩いたりしていました。

それで、何にもわからないのに、十数年後に『連句のたのしみ』という入門書を出してしまっただけです。書きながら勉強したわけですよ。これがわりあい評判がよくてですね、というのも恥をさらすようですけれども、季語ってどこで発表されるものなんだろうとか、どこで誰が決めるんだろうとか、そういうのも何にもわからないで始めたものだから、『連句のたのしみ』という本には「まず歳時記を手元に用意する事」というのを書いたんです。えらい先生方ですと、芭蕉はこうだというふうにいきなりそこから始まるので、初めてやってみようという人は、わからないわけですよ。だから私の手探りの「歳時記

をまず買おう」っていう、そういうレヴェルで親しんでくれた方がいらつしやつたみたいです。

それでなんと芥川賞作家の笠原淳先生が法政に教授として在籍していらつしやいまして、私は存じ上げなかつたんですが、私の連れ合いの車谷長吉と作家同士で知り合いだったものから、私に電話で、法政の学生さんたちと連句をやってみませんかとおっしゃつたんです。それは楽しいだろうなと思つて、お引き受けしたんですね。そして、シラバスを送つてこられましたら、日本文芸特別講義（近世）とかつて書いてあるので慌てまして。それから三、四ヶ月連句の猛勉強をいたしました、芭蕉・蕪村は評釈が行き届いている、これからもまだまだ積みあがつていくと思うんですが、一茶の連句研究が寥寥たるものだというのが、その時わかりました。

一茶研究者は、それは何人かいらつしやいますけれども、連句の評釈を見ますと、ほかの方がしてるのを、またしていたりするんですね。「この解釈が間違っている」とか、「この解釈はいかなるものか」というようにしていて、これだったら新しいのを紹介してくれた方がいいのにも思いました。なんか怖がつてらつしやるような、そんな気がして学生さんたちにも言つたんです。一茶の連句研究が手薄だから、みなさんさつてみたらどうですかなんて言つてたんですが、結局だれもやつてくれなくて。それで私が今、一茶の連句研究をしていると、こういうわけです。

連句は聞いたことないという方はいらつしやらないと思うのですが、きつと約束ごとには馴染んでいない方も結構いらつ

しやると思うんです。それで今日はプリントを用意いたしました。これを、最初の方だけ評釈というか、これはこういう意味じゃないかしら、というのを申し上げていきたいと思ひます。

これを一見見ると、謎なんです【本稿末の資料参照】。謎ではないようなのは、付きすぎの連句でして面白くないんですが、付きすぎの連句は、高浜虚子と正岡子規が巻いた連句があるんですが、これがいい例です。正岡子規という人は、連句は文芸ではないという事をいしました。この人は連句の中の第一目発句ですが、これを独立させることによって、俳句の近代を指摘したというか、個性を生かそうとしたというか。それですから、連句を否定したわけですが、ちよつと勇み足だったんじゃないかな、と私は思っています。

連句の付けには人柄が現れてくると思うんですね。このプリントは、夏目成美と一茶とそれから途中で浙江という人が入つて、三人で代わりばんこにやつていつてるんですが。それで付けはですね、付きすぎず離れすぎずというのが基本なんですけれども、やつぱり人によって目立ちたがる人は、「俺は俺は」、「私は私は」という句を付けたがるし、遣り句というのは——
遣り句とも言われてるんですが、前後を繋ぐだけに徹するといふ、これは人間ができていないとなかなか出来ないんですが、私もなかなか出来ないんですが、遣り句ができる人はベテランといわれています。こういう方が中にお一人いらつしやると思います。

一茶はあまり遣り句は作りませんが、一茶が座の中に一人いるだけで、景気が良くなるというか、はつと目覚ましくなりま

す。一茶という人は、小動物の俳句などとても優しい、平易な句を作って、人柄の、心の温かい人だと思われていますけれど、なかなか一筋縄ではないかない近代人であるところも、連句を読むと察するところがあります。

一茶は本当に苦勞人でした。みなさんもよくご存じだと思いますけれども、信濃の人ですね。そして母親に早く死なれて、二度目の母親を迎えるんですが、この人に男の子が産まれて、長男である一茶の方が江戸へ働きに行かされるんですね。これも、継母と一茶との折り合いが悪かったので、一茶の父親の判断じゃないかなと思うんですが。一茶という人は、人間的には腰の低い人だったようですね。それはそうですよ。江戸へ十三、四かそこらで一人で出てきて色々、何をして食べてきたかっていう研究ははっきりとはしていないんですけど、ともかくどうにかして俳諧を覚えたいんですから。勉強もよくしました。ただ文献の生嚼りはあったらしくて、この夏目成美に「日本紀をひねくり回す癖ありて」なんて、連句の中からかわれています。「日本紀」は『日本書紀』ですが、夏目成美という人は両国の札差で、豪商ですね。この人から見たら一茶は面白いですよ。野卑というか、鄙ぶりの句を詠んで、貧乏を売りものにするところもありました。一茶は諸国へ行脚あんぎゃにでますと、自分はこんなに苦勞して大変だったというところを気取らずに句に詠みます。地方のお大衆も驚いて、次第に人気が出てきたんだろうと思います。

連句は一茶の全体像がみられるということと、江戸時代の風俗が垣間見られるということですね。わからないことが結構あ

るんですけども、基本的にフイクションなんですけど、ところどころで本音とか、これ実体験なんじゃないかというような句もあります。運びの面白さとかそういうのがあるために、私は一茶連句を読み続けています。今は、千葉の朝日カルチャーセンターというところに秋・冬に月一回で行きまして、全部で六日間なんですけど、最初の三十分、一茶の連句を読みまして、そのあと実作です。一茶の句を発句に据えて、みんなで連句を作っていきます。こちらでも、浅沼先生が学生さんたちと連句をしたとおっしゃっていましたが、私も学生さんたちとしたことがあります。ゼミでは句会なんかもしました。ゼミの句会っていうのは、春夏秋冬で一回ずつしたのですが、その時は名前を隠してみんなで点数を入れるんですけども、何かかわいらしい句を作ると点数が入るんですね。それがわかってきました。学生さんたちと講義のときに連句の実作をしたことがあるんですけども、そんなに学生さんの数も多くなかったものから、その時は、短冊を回しまして、そして集めます。その中からいいなと思ったものを黒板に書いて、この句はここがいいと思うというふうにいたしました。学生さんたちの句で秀逸なのを私、今でも覚えているんですけど、

藤原紀香 俺には無理か

というのがありました。感心してしまいました。その時、藤原紀香って誰？ って私、聞いたんです。そしたら学生さんたちしらーっとして、呆れられてしまいました。それからだんだ

んわかってきました、ああ、この足の長い女の子かと思いましたが、なかなか筋が良かったです。

連句って、あまり関心がないという方もいらつしやると思うんですけども、書くのはこういうB4くらいの和紙を細い方で二つ折りにするんですね。

最初の方に一二三四五六、表六句というんですが、六句書きます。そして捲りまして、ここに十二句を書きます。ここまでは一の折、または初折です。それから名残の表十二句。なぜ名残かといいますと、これは連歌から来ているんですね。連歌はこの紙を四枚使います。四の折——死の折というのを嫌いまして、名残の折といったんですね。それが連句の方にも残りまして、私も二の折というよりも、名残という方が専門的な感じがして好きですね。こっちが名残の裏ですね。六句です。それで、略して句の頭にナオ（名残表）と書いたり、ナウ（名残裏）と書いたりします。

プリントの方をご説明していきましょか。

この歌仙は文化三年のものだそうです。発句は当季を詠むという条件があります。夏だったら夏の句を作ると。それから二番目のは脇というんですが、脇も発句に準じる。したがって夏ここからこの連句は夏作ったんだなということがわかります。夏目成美という人は、さつき申し上げましたけれど、一茶のパトロン、庇護者として、二十年近く一茶をかわいがったんですね。そして、毎月七・一七・二七日の内いづれか、自宅で連句や発句の会を持ちました。これもその時のものだと思います。

「雨ふりける日、一茶坊に古からかきをおくるとて」というふうに前書きがついています。

破れてもみかさともうせ木下闇こしたま

と作りました。この成美の句はなかなか優美でいいものですね。当時、「俳人番付」が出されたりして、成美は「関脇」くらいですね。一茶は「前頭」でした。そういうのを江戸時代は作っていたんですね。今だったら問題になってそういうのもできないでしょうけれどね。

小さい字の注の「2」のところに『古今集』の詠み人知らずの古歌が出ています。

みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は雨にまされり

こういう歌がこの下敷きにあるわけですね。雨が降ってきたので成美がこの傘を持っていくといいよ、ぼろ傘だけということで一茶に渡して、「破れてもみかさともうせ木下闇」と一句詠んでそれを発句に据えたんですが、成美は意味が解るかなってというような感じだったんじゃないですかね。一茶も成美の家に何日か泊めてもらっていた時に、金子が無くなったりして、疑いを掛けられて数日留め置かれたという事件がありますから、成美にしてみれば、年齢も十四か十五か下の一茶を試すような気持ちはあったと思いますね。それで、どんな句を付けてくるかなと意地悪く待っていたんですね。ふつう発句は端正

な、柄の大きな句が詠まれるので、これは異色ですが。一茶は

蚊やり／＼に萩のはつ花

と付けました。脇は発句と同季を付けますから、夏です。ね。

「蚊やり／＼に」蚊を追い払うために草を燻すんですね。「萩のはつ花」萩は秋の季語ですけれども、「蚊やり／＼に萩のはつ花」となると、蚊がまだ勢いがあるので夏の句ということになります。萩が宮城野の名物というか、宮城野ときたら萩なんです。だから萩といっただけで、「ああ一茶は自分が引いた歌をわかっているんだな」ということが、成美にはわかったんですね。でも「萩のはつ花」に普通だったら夏の季語、きれいな夏の季語を付けるくらいだと思えますが、「蚊」なんて持つてくるのは一茶だな、という感じがします。しかも「蚊やり／＼」。蚊やり火から煙がでていて、その一つ一つに萩の枝もあるよっていうんですね。萩が出てくるんですけども、萩も燻されてしまっている。やんちゃで、一癖ある付けだなという感じがします。

次の三句目は「第三」というんですが、これも止め方にいろいろ決まりがあるんですが、省略します。

ナどころの水を嘗なしる人とねて

「名どころの水」まあ、どこその水が、名水だとかそういうことですね。それを実際味わって知っている、そういう人と

寝て。「ねて」というのは、泊めてとかそのくらいの意味だと思えますね。といいますのは、表六句というのはいろいろ禁止事項がありまして、ダメなものは神祇・釈教・恋・無常・地名や人名ですね。神様仏様、恋もダメですね、無常——人が死ぬとか、そういう強い表現はいけない。そろそろつと始まっていくのがいいと、そういうことなんです。ですから、名水を知っている人を、つまり旅人を蚊やり火をたいている家に泊めたとそのくらいの意味だと思います。

舟をよばりにまゐる琵琶持びわもち

この一茶の句の「琵琶持」は琵琶法師でしょうけれども、琵琶法師が「ナどころの水を嘗しる人」ではないかと付けたわけですね。前の句の人を見定めている付けですね。「舟をよばりに」というのは、舟を大声で呼ぶ、ということでしょう。しばらく後の連句にやはり一茶の付けで「舟よ舟よとよばる笛持」という句がありまして、一茶は似たような句が多いと研究者のあいだで言われているんですが、この句を読みますと、「舟をよばりに」というのは、舟よ舟よと叫んでいるというわけでしょう。これから川を渡らなきゃいけないので、まあ、タクシーを止めるような感じだと思えます。大声出して舟を呼んでいるんですね。

瘦やせぼねに欠かたる月をうちながめ

成美の句です。私は最初「琵琶持」、琵琶法師の人が瘦せていて月を眺めているんじゃないかと思っただんですが、琵琶法師って大抵盲目の人ですから、琵琶法師じゃなくて、これは別の人、あるいは自分のことかもしれない。初折表五句目が月の座、月の定座といわれています。定座も変えたりしますのですが、必ずしも五句目じゃなきゃいけないってことではないんです。歌仙の場合は二花三月といいまして、花の座が二つ、それから月の座が三つです。これも連歌の方は四花七月ですね。連歌を簡略化して連句になっているわけです。そして、月が誰、花が誰というのをみていきますと、面白いことに月の定座は最初成美ですね。次の月の定座はしばらく行きまして、

轆轤ひく手にかゝる夕月

これも成美が付けています。それから、花の座。花の座も成美が付けてるんですね。

花の陰鑑ながらにもの書て

それから面白いことに、名残の表の月の座、

白木榿月の頃とて洞みけり

優美な句ですね。これも成美なんです。これは間に浙江という人がきまして、浙江、成美、一茶の順できてますので、偶

然だと思わなくても、成美がなんと二花三月の内の四つまで一人で占めてしまった。それで最後の方ですね、一番最後の句は挙句というのですが——普通に使われているあの挙句です。この挙句からきてるんですね。で、普通は挙句の一つ前の句が花の座なんです。もう一つ前に移動させています。というのは、さすがに夏目成美も自分は花と月もらっちゃって悪いから、あんたやんなさいと、きつと振舞ったと思うんですね。こういうこともありまして、これは安東次男さんに聞いたんです。でも、私の連句の師匠筋というのが安東次男さんなんです。それで、安東さんに言わせると、歌仙というのは三人が元だということですね。それで、例えばABCABCと付けていくと、Bの人が月花を独り占めしてしまう。

さつき申し上げませんでしたけど、発句というのは正客といいますが、大事なお客様が、ここはいい処ですねというふうに付ける場合が多いんです。「五月雨をあつめて早し最上川」という有名な芭蕉の句がありますが、芭蕉は、連句の席では「五月雨をあつめて涼し最上川」と詠みました。この方が挨拶句としては気持ちがいいですね。あとで自分の句に直したのです。

この連句を教室で取り上げましたら、学生さんが、自分は「五月雨をあつめて早し最上川」というのは覚えていたけれどもって聞いてくれましたね。えらい感心しました。いい質問でしたね。「ようこそいらつしやいました」というのが脇です。この場合成美の家でやっていて、なんで主人が発句やってんのという事になりますけれど、何度も何度も連句を巻いていると思う

んですね。ですから代わり番とか、そういうことなんでしょう。たまたま浙江さんがきたので、亭主の成美さんのところに全部行ってしまった。最後には振舞って自分も面白いよというふうにして、ほかの人にあげた。だから、安東次男説というのは、こういうところにも説得力があるなど、私は思っていて、いつも紹介しています。プリントに戻ります。

柱の孔あなのうそさむうなる

というのが一茶の句ですね。一茶の句って、障子の孔とか壁の孔とかそういうものがよく出てくるんですね。有名な句にも「うつくしやせうじの穴の天の川」というのがあるんです。何かこう、いじましいんですね。やっぱり向こうの景色と今自分がいるところと、その間に障害物があつて、彼我の距離がまったく縮まらない、そういう感じもしますね。「うそさむ」というのが、秋の季語です

そして、その次も一茶なんです。なぜここで一茶が二句続くといいますと、「ぞろ／＼と」の上に小さく「ウ」と書いてありますね。これが裏という意味です。今まで長句短句長句ときましたけれど、ここで順番を代えたと短い句、七七をやつてきた人が今度は五七五をやる、そういうことになります。こういうふうな裏に入った表に入ったりするところで、両吟の場合には、順番を代えて、一回ダブって作ることが結構あります。一茶の次の句ってすごく面白いんですね。

ぞろ／＼と呉服くれはまつりの小侍こざむらひ

「4」の呉服まつりの注を見てください。摂津の国池田——大坂ですね。ここにある呉服神社の祭り。九月一日。これは『二茶全集』からコピーを取ったんですが、全集の編纂者がこういう注をつけてくれてあつて、非常に助かります。「呉服まつり。九月一日」ということで、秋の季語ですね。さつき言ってますんですけど、「瘦ほねに欠けたる月」——「月」だけで秋の季語です。月は秋の季語なんです。春の月ですと「臘月」と詠んだり、夏の月ですと夏の季語を持つてくるとか、「夏の月」とかって詠むんですね。秋は、ほかに何の季語がなくても、「月」だけで秋です。冬は「寒月」とかそういう言葉もありますね。

連句をやっていると、歳時記を引くことがけっこう多くなりますが、俳人の人達っていうのは、歳時記が全部頭に入ってますよね。驚くほどです。でも俳句の結社の人たちは、連句はやってはいけないといわれている人もいるそうです。連句は基本的にフィクションです。でも体験がでてきたりするものなんです。恋の句は、恋の定座というのは、決まった位置はないんですけれども、だいたい一折に一カ所くらい、この辺とこの辺とというのはあります。そして、表六句は恋の句はいけない、と。それで、最初の恋の句は初恋とか、あつさり作つて、後の方のはちょっと濃厚なとか。私も捌いたりするときがあるんですが、そんなのは私にはできないとか、怒られたことがあります。フィクションでいいんですけど。それで俳句の人たちは、

フィクションを嫌うんですね。やっぱり自分の目で見たもの、そういうものを大事にするようです。

私も連句のために俳句をちよつと勉強したことがあるんです。長谷川耀さんの俳句の会に月一でしただけど、二年くらい通いました。その時、吟行に連れて行ってくれました。そうするとみなさん、花なら花で、じいっと見るんですよね。私そういうのはあまり好きではなくて。やつぱり後から自然に出てくるのがよくて、作ろうという意識はあまり好きじゃなかったですね。今でも俳句を作ろうっていうのは、何かいただきものをした時ですね。そういうとき、葉書に一句添えて出します。そういうふうにして書いてきてくれる人もいます。それを見て「下手だねえ」と言って笑ったりしているんですが。そこから考えると、礼状の一句というのは、下手なほど喜ばれるんじゃないかなと思つています。こないださくらんぼをいただいた時は、「さくらんぼ齧るはどこかへいくでせう」という、そういうへんな俳句を添えました。

途中でへんな話をしてしまつて。

「ぞろ／＼と呉服まつりの小侍」この句が面白いなと思つたのは、柱の孔からぞろぞろとお祭りの人たちが出てくるような、そんな印象があるんですね。私も一昨年「一茶の連句」という本を出しましたが、書評に「詩人の読みだ」と書かれてしまつて。何か突飛な考え方や感じ方をしてしまつたりすることもあるようです。次は成美です。

霏しづくながらに松の木をひく

これも夏目成美と一茶の、二年ほど前の連句にですね、一茶の句で「山城の衆に野松を見てもらひ」山城——京都のほうですか。植木屋さんですかね。どの枝ぶりの松がいいか、を見てもらつたんでしょうか。一茶も、お大尽の句を作つたりするんです。貧乏のほうは実感のこもつたすごいのを作っています。

「金を拾ふて棒で打たる」とか、「ひだるい腹を作っています」「何喰はずともあ、涼しいぞ」「日は暮れか、る腹はへるなり」。こういうので一茶の句は研究価値がないと言われてしまつてないでしょうか。それから、お大尽の句はやつぱり着丈にあつてないというか、こういうのも作るんですよ。「美しく寝て暮さる、花も咲」「百年も一人寝て見る花植て」「けふは芝居日翌日はからくり」。裕福な町家の暮らしぶりを詠んでいますけれど、一茶自身の刺すような視線を感じないわけにはいきませぬね。それで、さっきの貧乏人の句からは肉声が聞こえてきますね。打たれ強さ、たくましさ、快活さがあります。

一茶研究家の丸山一彦さんという方、亡くなられましたけれども、「一茶の俳句や俳文はよく知られているが、連句については不当に閉却されてきた。」「不当」だつていうふうに書かれています。技倆の伯仲した親しい俳友、例えば樗堂——栗田樗堂という、松山のお寺さんの俳人です。この人も番付では上でしたね。一瓢という人は江戸日暮里の本行寺、月見寺というお寺の住職です。鶴老、この人は下総の守谷——いまの茨城県。この人も住職ですね。こういう人たちの家を泊まり歩いていた

んですね。千葉県流山にも一茶双樹記念館というのがあって、秋元双樹は味醂醸造業者です。この人の家にも、生涯で一番多く、五十何日か泊まったと言われています。私も行ってみましたけれど、双樹の昔の家を解体修理したものだそうです。一茶庵というのがあって、これは瓦葺でした。名前だけだつていう話です。こういう人たちを相手とした巻々は「吟調に張りがあり付合つけあの呼吸も合つて佳篇が多いが、晩年に郷里の門弟たちと試みた作品は吟調の緩みや一茶調の安易な繰り返しが多く、見るべきものに乏しいようである」なんて丸山さんは書かれていますけれど、小林計一郎さんという、長野の方ですが、この方でも、「一茶の連句はいままであまり研究されていないが、この連句編を通読してみても、これが一茶研究の宝庫だとつくづく感じた」と書かれています。こういう方もいらつしやいます。

一茶はご承知のように家庭運に恵まれなかつたですね。結婚するのも遅くなつたし、生まれた子どもも次々死んでしまう。最後の三番目の奥さんに、一茶が亡くなつた時お腹に子どもができていて、この子が成長して、この前一茶記念館という、黒姫にあるんですが、一茶のお墓とか亡くなつた土蔵、こういうのが復元——お墓はそのままですけれども、復元されている町ですけれども、一茶記念館のこの前の館長さんは小林さんと言つて、一茶の子孫だそうです。

郷里の門人たちと巻いた連句の時間があつて一茶は救われていたんじゃないかなというのが、私の見方です。だから、「見るべきものに乏しい」なんて、突き放した言い方はちよつとでないですね。

何か、ご質問とか。これ聞いてみたいとか、この解釈間違つてるよ、とかおありではありませんか。

質問A断片的にしか、近世文学を読んでいないんですけれど、

高橋さんからみて、その変遷というんでしょうか、俳句の経過というのはあるんでしょうか。

一茶に限つて申し上げますが、独得の一茶調というのが出てきたのが、かなり後でしょうかね。一茶調というのは、オノマトベとかが多いですよ。それから、鄙ぶり、そういうのが一茶調です。でも、子どもを亡くしたころの「露の世は露の世ながらさりながら」なんていうのはすごいですよ。ああいう句は一茶の句の中でも最高峰みたいな感じがしますけれども。そうですね、郷里で最後の方は、連句でも自分の以前作つた句をまた持つてくるとか、そういう事がありますから、丸山さんにひどいことを言われちゃつたりするんでしょうけれど。変遷というのとはわからずね。

質問B 成美の頃はどうかたつたのでしょうか。やつぱり成美の影響

を受けているというか、むしろそれに反発しているという感じなんですかね。

成美の影響は受けていないと思いますね。夏目成美の句つて、とても品が良くて。夏目成美は、自分はこういう句は詠めない

なつていうのを一茶が詠むものですから、面白がっていたという感じで。でも、一茶は成美に添削してもらってたんすね。「是がまあつひの栖か雪五尺」というのも、「これがまあ死所かよ雪五尺」というあからさまなのを、成美が直したとかつて書かれているのを、読んだことがあります。影響を受けたということとは、ないんじゃないかと思います。

夏目成美にお世話になってきたので、郷里に引つ込んでからもこういう句ができたっていうのを送って、採点——マルつけてもらったりペケつけてもらったり、挨拶だったんじゃないかと思えますけどね。でも、入れるべきところは入れていたみたいですね。「つひの栖」に直した方がいいっていうのもそうでしょうね。

質問C 高橋さんのご意見で構わないのですが、結局、番付なんかの成美は近世で名前を知られていて、僕も読んだことがありますけれど、最終的に一茶のほうが残ったというのは、野卑で生活感があふれるとか、そういうことだけですか、どうでしょう。

いや、それだけで残ったわけじゃないですよ、それは。小動物の俳句なんか、なかなか詠めませんものね。あれだけ大きい器の俳人はなかなかないと思いますね。一茶が大関になったり横綱になったりする番付はないんですけど。番付は関西の方で作られていたんでしょうか。だから、関西の方へ行脚すると有利になるとか言われていたようです。今は、関脇くらいに

なるんじゃないですか、一茶は。まあ、芭蕉を横綱にして。宗左近さんにいわせると、「一に芭蕉、二に蕪村、四、五がなくても、三だよ、一茶」というんですけれどね。フランス人などは、芭蕉・蕪村より一茶の方に親しみを持っているという話ですね。外国の人にはわかり易いかもしれません。

質問D 芭蕉もそうなんですけれど、放浪俳人としてたとえば山

頭火とかそういう人と同系列に扱われる傾向がありますよね。

山頭火と一茶は、やっぱり違うような気がしますすけれどね。山頭火は季語も定型も束縛と感じた人ですが、山頭火を水の人とすると一茶は土の人で、やむなく放浪をしたのではないでしょう。一茶の方が豊かな感じがしますけれど。すみません。あいまいな表現で。

本日は、お招きいただきありがとうございました。連句の世界に少しでも興味をもっていただけたらうれしいです。

(たかはし じゅんこ・詩人)

【資料】「二茶全集」第五卷（信濃毎日新聞社・昭和五十三年刊）

より転載

一茶の連句

六〇 破れても（歌仙） 文化三年夏

成美の即興句に一茶が脇を付け、折柄そこに浙江が来合せて、この一卷が成ったのであろう。年時の推定の手がかりはないが、『梅塵抄録本』や『茶翁聯句集』の記載順によると、文化三年頃の作らしく思われる。梅塵本を底本として、異同を注した。

雨ふりける日、一茶坊に古からかさをおくるとて

(夏) 破れてもみかさとまうせ木下閣 成美
 (夏) 蚊やり／＼に萩のはつ花 一茶
 (夏) ナどころの水を昔しる人とねて 美
 (夏) 舟をよばりにまるる琵琶持 茶
 (秋) 瘦ほねに欠たる月をうちながめ 美
 (秋) 柱の孔のうそさむうなる 茶
 (秋) ぞろ／＼と呉服まつりの小侍 茶
 (秋) 雫ながらに松の木をひく 美
 (冬) 垢枕あはれことしも暮にけり 茶
 手をうつたびに跡しさる君 浙江
 太々の小判をこぼす飯のうへ 美

(夏) すゞしく見ゆるみちのくの空 茶
 古家の鳩なくたびにこけかゝる 江
 轆轤ひく手にかゝる夕月 美
 (秋) 柿の渋ぬけよ／＼と歌をよみ 茶
 雁のよこぎる海のちひさき 江
 (春) 花の陰鏝ながらにも書て 美
 世は陽炎のへんてつもなし 茶
 (夏) 蛤のくちにひろがる小塩やま 江
 扇にかほも見せぬ蜷川 茶
 (冬) ぬす人は今をなごりの鐘なりて 茶
 車にまじる門の山茶花 江
 綾絹の袖に仏の油かけ 美
 誰がねたみに星は飛らむ 江
 (冬) 二ツ三ツ壁のやぶれも世間むき 茶
 よし野の坊につくる粟餅 美
 雀なく今朝はずらりと衣がへ 江
 牛のこゝろの雨にがつくり 茶
 (秋) 白木榿月の頃とて濁みけり 美
 踊たむくる市姫のみや 江
 (秋) 秋はたゞ箸捨て日も淋しくて 茶
 鍋鶴あそぶ栗橋の宿 江
 (冬) 竹斎に躋くり金をまゐらせむ 美
 素湯にもむせるはつ花の蔭 江
 (春) 芽柳を指さして泣翠簾の間 茶
 わすれ貝にも春はたちけり 美

2 みかさと…… 「みさぶらひ御笠と申せ宮城野の木の下露は

雨にまされり」(古今集・卷二〇・東歌)。宮城野は秋の名所。

4 呉服祭り 摂津国池田にある呉服神社の祭り。九月十八日。

祭神は応神天王の御代に呉国から来朝した織女呉織という。



2013年7月13日 国文学会大会にて